

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

大学の発信力が結ぶ地域社会との連携

田中 則仁

大学の研究者の役割は、学生教育とそれに伴う各種委員会を通じての大学行政、そして研究成果の発信の三本柱である。各自の専門分野の発信方法については、著書や論文を通じての発信、地域社会との連携のなかでの発信がある。

地域の人々からすると、大学はどうも敷居が高く、近づきたい印象があるようだ。国際経営研究所の所員の専門分野をみると、大変な価値のある研究実績や専門性を蓄積しており、知識の宝庫であるといっても過言ではない。授業期間中は学生教育や研究指導などで、時間的にもなかなか思うに任せないこともあるが、所員各位がもう少し大学から地域社会へ出かけていってもよかろう。

筆者の分野では、昨年 11 月に平塚市産業振興課との共催で、企業経営者を授業に招いての講演会を実施した。中小企業 2 社の経営者と社員の方 4 名での講演とディスカッションは、学生にも新鮮に映ったようである。技術やアイデアの具現化に向けた逸話には、必ずそれに至る背景や登場人物のひとかたならぬ苦労がある。それに直面した当事者の話であるだけに、学生たちも大いに刺激されていた。しかし振り返ってみると、当日一番勉強になったのは、司会進行役の筆者であった。本来なら、こちらから連絡を取り、訪問調査に出かけていって話を伺う経営者の方々に、学内に来てもらい、自分の聞きたいことが聞けたのである。企業の方々へは、学生からの質疑応答に加え、千文字程度の感想文を全員 120 名分コピーして渡し、率直な意見をフィードバックできた。

筆者の専門分野では、現場はまさに地域社会や企業の活動である。自分自身が現実の動きをきちんと見極めながら、企業に向けての今後の課題などを発信していく。また自治体と共同で政策提言をしてい

くことが、現地の実情にもとづく実践力をともなった研究の発信であると思っている。

人文科学や語学の専門家であれば、中学高校の先生方や生徒向けの最新情報を提供できよう。教員免許更新講習にみられるように、中学高校の先生方も教科・科目の最新情報に接する機会を通じて、最先端の研究成果に着目している。筆者地元の公立中学校では、本学横浜キャンパスの教員と学生が定期的に訪問し、中学生への実習指導を通じて、教職課程の学生にとっても貴重な機会になっている。また地域研究や国際理解教育の最新の話は、地理や政治経済の科目の先生への情報提供として評価されている。

地域社会との接点は、研究者の専門性によってさまざまであろう。自治体や企業ばかりでなく、近隣の中学高校はじめ、もっと身近な単位でも見つけることができる。研究者の使命などと大袈裟に考えず、肩の力を抜いて、自身の研究成果を伝えてみたい。また可能であれば一緒に学生も紹介できると、双方にとって相互啓発につながる。このような場を提供することも、地域に根差す本学の教員の役割ではなかるうか。

学内から外に出て、地域との連携を通じて情報の相互交流をはかっていく。そのような一歩を踏み出すことを、今年の抱負と目標にしてみたい。

(所員/たなか・のりひと)

産官学連携の図



国際経営研究所**主たる研究支援体制、活動状況について**

神奈川大学の研究に関する方針を踏まえ、地域密着型の経営ならびに国際的な経営をも視野に入れた研究推進を目指しています。

研究支援体制、活動状況について新たな報告事項および内容概略では下記のとおりです。

出版活動

今年度の論文誌『国際経営フォーラム』が刊行されました。既にお手もとに届いていると思います。No.24の執筆者は全部で9名。多彩なテーマと充実した内容でした。次号の『国際経営フォーラム』にも多くの研究員の方々の寄稿をお待ちしています。

講演会、シンポジウム

今年度は「グローバル」がキーワードです。12月2日(月) 11:00から神奈川大学湘南ひらつかキャンパス1号館250教室で、地元の平塚を知るというローカルテーマの講演会が開催されました。

テーマ：平塚の地域力を知る
— 産業の糧として —

講師：地域デザイン研究所主宰 飯尾紀彦^{としひこ}氏
主として商工業関連のお話をさせていただきました。

演題には「世界一、日本一のものづくり/地場産品の商品づくり」という副題が付き、平塚そして湘南地域から産み出される品々が紹介されたのですが、時間がいくらあっても足りない感じでした。

飯尾氏は現在、平塚市産業活性化プロジェクト事業の一環で平塚市と周辺地域の商工業、農林水産業、観光業、教育・研究機関の活動をフィールド調査中。膨大な成果は市のHP等で公開される予定なのでそれを楽しみにしたいと思います。

〈 来年度の講演会について 〉

2014年度は経営学部でBSAPプログラムが本格的に開始されることもあり、東アジアに眼を向けたテーマの催しを所長が検討しています。

常任委員をはじめスタッフ一同で、来年度の講演会にも精力的に取り組んでいきます。

地域、社会との取り組み

当研究所では今年度、平塚市主催セミナーなどの産業活性化に関わる行事の後援活動を行っています。昨年11月25日には第5回目が実施されました。

◇ 第5回産業活性化セミナー

「アカデミックな視点で検証する産業ロボット特区の可能性」

於 平塚商工会議所3階大ホール 15:00～

平塚市など相模川流域の市が、さがみロボット特区に指定されたことを受けた啓発的な催しでした。

2014年度共同研究プロジェクトについて(事前案内)

4月になり新年度がスタートしましたら、正式に共同研究プロジェクトの新規募集を行います。

例年、年度開始の時期は繁多なため、各位におかれましては余裕を持って計画をご準備ください。

◇ 国際経営研究所の自己点検・評価への取り組み ◇

神奈川大学では大学の質保証および社会に対する説明責任を果すために継続的な点検・評価活動を行い、大学改革を推進しています。2010年4月からは専門部局を設置して精力的に実施していますが、学部などの教育組織、研究所などの研究組織はもちろん、事務局に及ぶ正に全学全組織が自己点検と評価を行っています。当研究所でも責務を率先して果していますが、2012年度に策定された当研究所の「研究に関する方針に係わる中期目標・行動計画・評価指標」の進捗状況に関して、今年度(2013年度)についての年次報告を14年1月に提出したことをご案内します。

組織内の自己点検・評価活動の一環として行われるこのようなシステムは丁度、ISOのシステム規格のように客観性と対外的な保証を確たるものにするのですが、そこに出てくるのがPDCA。PLAN-DO-CHECK-ACTION。きちんと確認して行動してそしてフィードバックするというIEの基本を大学改革に使う時代の到来なのですが、実は当研究所の本領とするところかも、と思いつつ今後とも自己点検・評価に取り組んで行く所存です。

強面首相の意外な一面とオリンピック代表ユニフォーム

竹腰 誠

スポーツの歴史の中でオリンピックほど様々なドラマを生んだイベントはない。この国経研だよりが発行される頃にはロシアのソチで第22回冬季オリンピックが開幕を迎える。残念ながら夏季オリンピックに比べると、冬季大会の注目度は少し寂しい感じもするが、スキージャンプの指導法とスポーツ史を専門とする私にとっては非常にワクワクする2週間であることは言うまでもない。

さて、昨年9月に招致が決定した2020年東京大会においても「東京オリンピック・パラリンピック」と当然のように両大会を合わせた招致活動を行っていたことは記憶に新しいところであるが、オリンピックとパラリンピックを並列に考えるようになったのは1994年頃からのことであり、それまではオリンピックとパラリンピックは全くの別

大会として扱われていたことをご存じであろうか。スポーツ環境の整備面から考えて、1990年代以前は会場設備の面、インフラ整備の面等において、様々な問題があったであろうことは容易に予想される。実際に1998年長野オリンピック・パラリンピック大会では車イスでも乗り降りが容易な低床バスと呼ばれるバスが不足し、全国のバス会社が長野市に対し貸出を行っていたほどであるから、オリンピックとパラリンピックを両方誘致しようというのは大変な問題であったのだろう。今でこそ時代の流れで、この両大会は並列で捉えるのが当たり前になっており、期間以外、同じ環境(施設等)を使用して行う大会であると考えられるようになってきているが、当時の苦労は並大抵のものではなかったはずである。

その長野大会であるが、開会前の大赤字予想を覆して日本選手の活躍も相まって各会場にたくさんの観客が足を運んだ。日本スキージャンプチームの団体戦金メダルは、いまでも語り種になるほどインパクトのある勝利であったし、開催県の知事がミズスマシのようだと言ったスピードスケート競技でも金メダルを含めたたくさんのメダルを獲得するなど、



ジャンプメダリスト

大会は後半になるにつれて異常な盛り上がりを見せた大会であった。

研究余滴

このような盛り上がりを受け、オリンピックの開会式からちょうど一ヶ月後に開会式を迎えたのが長野パラリンピック大会である。日本で行われる初めての冬季パラリンピック大会で、私は日本アルペンスキーチームのトレーナー(コンディショニング担当)を務めており、日本選手団の一員として大会に臨んでいた。前回ノルウェー・リレハンメルでのパラリンピック大会では、オリンピックチームとは違うユニフォームで大会に参加していた日本のパラリンピック選手団であるが、この大会ではある要人の一言でオリンピックチームと同じユニフォームが準備されることになり、我々スタッフも含めてチーム全員がオリンピックチームとパラリンピックチーム合同のユニフォームを着ることができるようになったのである。

この要人とは、当時の首相・橋本龍太郎氏(故人)である。当時より、オリンピックは文部科学省管轄、パラリンピックは厚生労働省管轄と現場にいる我々にとっては不可思議な区分けがあり、予算の出所から使い道にいたるまでオリンピックチームとパラリンピックチームは別のものであるという認識をされていた。幼少の頃から武道(剣道六段)やスポーツに触れ、実父に障がいがあるため障がい者スポーツに



開会式にて (トレーナーチーム)

対しても少なからず知識を持たれていた橋本氏の「一緒にしてあげればいけないか…」という一言で、長野パラリンピックに出場する選手たちは、全てのアスリートの夢である『オリンピック代表のユニフォーム』を着られることになったのである。かく言う私も幼少の頃からその『夢』を持っていたわけであり、様々な偶然が重なってその日本代表のユニフォームに袖を通すことになった。

大会前、首相官邸での選手団激励会で、橋本首相ご本人からお父様の障がいに関する話を聞き、事務



官邸での激励会で首相夫人と

官からの次の会議があるという耳打ちを無視してまでも選手たちと優しく会話する姿を見た。それはテレビで見る強面首相の顔ではなく、ただの「父親思いの優しい息子」の姿であった。四年に一度のオリンピックイヤーを迎える度に、その時の光景を思い出し、あわせて興奮と緊張感がよみがえってくる。

冬季オリンピックイヤーの今年も『アスリートの夢』を叶えた選手達が夢の大舞台に立つ。彼らの奮闘に眠れない夜を過ごす時間が楽しみでたまらない。

(所員/たけごし・まこと)

日経 TEST・学生団体対抗戦

菅原ゼミ 団体賞第3位に入賞

昨年11月に実施された、日本経済新聞社と日本経済研究センターが主催する日経TESTで菅原ゼミ生が全国レベルで競い合い、団体賞第3位に入賞しました。TESTは経済知力テストを英訳した「Test of Economic Sense and Thinking」の略称で、知識だけでなく、経済の仕組みや流れを理解し新しいビジネスを生み出す能力を測定するテストです。今回の参加者総数は63,693名で学生の参加者は8,541名。学生団体対抗戦の結果は以下のとおりでした。

- 1位 滋賀大学 株式投資研究会 チームA
- 2位 慶応義塾大学 経済新人会
- 3位 神奈川大学 菅原ゼミ STOCKMR
- 4位 名古屋大学 中東ゼミA
- 5位 立教大学 山口ゼミナール
- 6位 同志社大学 柿本ゼミ
- 7位 早稲田大学 会社法研究中村ゼミ チームCVBM
- 8位 明治大学 メイジスト
- 9位 一橋大学 円谷ゼミ3期
- 10位 摂南大学 ESC準備会 チームN

第10回 神奈川産学チャレンジプログラム

穂積ゼミ:最優秀賞・優秀賞 田中ゼミ:優秀賞

神奈川産学チャレンジプログラムは、神奈川県内の大学と社団法人神奈川経済同友会の会員企業・団体とが協働し、産学連携による学生の人材育成を目的とした課題解決型研究コンペです。

2013年度は県内16大学から245件の応募があり、本学からは2チームのレポートが最優秀賞、4チームが優秀賞に選ばれました。()内は課題設定企業

穂積ゼミチームのテーマ

- ・横浜駅東口地下街ポルタの知名度につながる施策の提案 (横浜新都市センター株式会社)
- ・窓口の他行庫との差別化 (川崎信用金庫)
- ・リアル店舗のインターネット取り込みによる新しい顧客価値の創造 (株式会社CFS コーポレーション)

田中ゼミチームのテーマ

- ・ホテル内の無線LAN環境を活用した新しいサービスの提案 (株式会社ホテルグランパシフィック)

編集後記

今号もカラー図版の多い、楽しい紙面になりました。ご高覧ください。(H)